

タイトル「大相撲の不思議」（全 208 ページ）

出版社：潮出版社 2018年9月5日発売



著者：内館牧子（ウチダテマキコ）

秋田県生まれ。武蔵野美術大学卒業。三菱重工業に入社後、13年半のOL生活を経て、1988年に脚本家デビュー。テレビドラマの脚本に「毛利元就」「ひらり」「私の青空」など多数。2000年から10年まで女性初の横綱審議委員会審議委員を務める。06年、東北大学大学院文学研究科修了。05年より同大学相撲部監督に就任し、現在は総監督。

目次

- 1章 「神」と共にある世界
- 2章 人間社会とどう折り合う？
- 3章 くやしかったら強くなれ
- 4章 時代に応じた離れ技

本書のコアコンテンツ

・大相撲は摩訶不思議な格闘技。相容れない六つの要素を満たさなければならない。

神事	「土俵祭り」という儀式を行い、土俵に神を迎え降りてきた神は15日間土俵を見守り続ける、そして終われば神を送り出す。 相撲は神のいる土俵において神に恥じない格闘技を行うスポーツ。 土俵祭りを一度見ると、横綱が立ち会いで変化したり「猫だまし」というせこい技をだしたり「勝ちゃ文句ないだろ」が軽蔑されることも分かってくる。
スポーツ	奇襲だろうとだめ押しをしようと勝つことが第一義の世界。
伝統文化	伝統を守り髷を結って着物を着る世界。 伝統文化の中には精神文化も含まれる。

興業	勝ち方が汚いと「みっとない勝ち方をするな」と親方に叱られる。料金を取って見せるもの。
国技	国歌は「君が代」、国花は「桜」、国鳥は「雉」。国技は「相撲」。国技であり続けるためには、保守すべきは断固として保守すべき。近代的な「歴史」や「思潮」に従う必要は無い。
公益財団法人	相撲の普及、指導を目的とする財団法人であり、営利とは無関係。税制など多くの優遇措置が取られている。

- ・「女性を土俵に上げないのは男女差別だ」との声があるが、大相撲を現在の価値観で語ろうとすることが間違っている。そもそも土俵は土俵外の世界とは異なる聖域。差別では無く一方の性だけが担い伝えてきた文化。伝統の上に存続し続けている相撲は近代的な歴史とは違う時間を生きている。相撲史に無知で大相撲の男女共同参画を叫ぶのは無知と言うより無恥。
- ・聖域では「右は浄、左は不浄」という概念がある。従って本横綱朝青龍が左手で小刀を切り左手で懸賞金を受け取ることを許してはならない。
- ・平成 22 年白鵬が 63 連勝を重ねた九州場所で稀勢の里がみごとに白鵬を破ったときに観客の熱狂はすさまじく、観客からは「バンザイ」という声上がり万歳の大合唱。いくら大一番で日本人が勝ったからと言って万歳三唱は許されないだろう。この万歳事件から白鵬のありようが少しずつ変化していった。多くの記録をぬり変え双葉山を目指し心技体を磨いてきた。こんな無作法をやってはならぬことを白鵬自身が一番よく分かっているはず。外国人と言うだけで自分が負けると日本人は万歳三唱するのかと白鵬が思ったとしても不思議はない。以来白鵬は立ち会いに変化もするし横綱としての格も自ら放棄したように見える。
しかし双葉山が安芸ノ海に負けたときの熱狂も座布団は飛び交った。観客の興奮の発露として座布団を投げる代わりに万歳となったのではないか。観客の熱い想いが形になって力士に届くことはこれも一つの懸賞なのだ。

感想

- ・筆者、内館牧子女史は「終わった人」「すぐ死ぬんだから」等を執筆しているれっきとした小説家。そしてこの本は、本格的な相撲研究の本。
- ・筆者は単なる相撲好きではない。東北大学大学院文学研究科に入学し相撲史を学問として研究、修士論文「土俵という聖域」を提出、相撲教習所に 1 年半新弟子として通い、2000 年から 10 年間横綱審議委員を務めた女性。恐れ入った。我々は大相撲について自分の意見を言う前に、彼女の言葉に心して耳を傾けなければならない。
- ・白鵬のことがよく話題に上る。大相撲が相容れない六つの要素を持っている格闘技ということを理解すれば、白鵬が横綱としてふさわしくない振る舞いをしているのは明らかであろう。